

凡例

- 各症例提示部において弁証の鍵となる四診情報にはアンダーラインを引いた。それ以外の文中でのアンダーラインでは重要箇所を示した。
- 本文中、重要な中医学用語は**太字**で示した。
- 本書はA 症例、B 重点小括、C 小講義の3つから構成される。
- A 症例は以下の順で示した。(症例により西医診断として現代医学の診断、および既往歴を併記した)
 1. POINT：症例を通じて学習するポイントを示した。
 2. 患者：症例患者の基本属性を示した。個人が特定され得るような情報は除外した。
 3. 主訴
 4. 初診：初診の年をX年とし初診の日付を記した。
 5. 現病歴
 6. 理学所見：身長、体重、体温など四診所見以外の身体所見を記載した。
 7. 検査所見：初診時に当院で行った検体検査、あるいは患者が持参した他院における直近の検査データを記した。
 8. 四診：望聞問切の各所見をこの順序で記載した。持脈軽重法を用いた脈診は表の形で記した。

注) 持脈軽重法は『難経』の五難に記載のある切脈法で、各臓ごとの脈位(深度)を重視している。五難では“菽”という豆の重さで表現されているが、“按之至骨，舉指來疾者，腎部也”との記載から、至骨を15菽としてこれを五分分した深度がそれぞれの臓の基準となる深度としこれを0で表記している。+は基準より浮側に、-は沈側に位置し、それぞれの臓の陰陽の偏位を反映すると解釈している。ただし、この+や-といった表記の仕方は筆者が普段カルテ記載に用いているものであり一

般に用いられているものではない。なお、症例を読む前に〈小講義4 切脈法と持脈軽重法〉を一読することを推奨する。

9. 弁証

10. 論拠：弁証の根拠を解説した。

11. 治法：症例の弁証に対応した治療方法の指針を示した。

12. 処方：医療用エキス製剤はメーカー間で異なる薬物や用量があることを鑑み、メーカー名を明示した。湯液を用いた症例で、基本骨格とした方剤がある場合はその名称を付記した。

13. 経過：治療経過を記載した。

S : subjective (主観的情報), O : objective (客観的情報),

A : assessment (評価), P : plan (計画・治療)

14. 解説：症例の病態や治療に関して解説した。

●B 重点小括

各症例の病態、用薬などに関する重要なテーマを取り上げて解説した。

●C 小講義

〈重点小括〉で取り上げなかったより一般的なテーマ、特に脈診に関連する項目を中心に解説した。